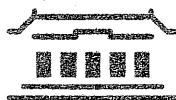


# 笑って吹き飛ばしまっせ

お相手  
で  
勝

## 関西遺産



毛が気になり出した。熊本出身の九州男児。「あるものがなくなるってのはイヤだった」。ところが大阪で開き直ってネタにしたところ、客は劇場を揺らすほどの笑いで応えた。いまは思う。「この頭で、芸人として生きていける」

関西では、街を歩けば自虐ネタにぶつかると。

曇天の下、おっちゃんにテカテカ頭をさすってニヤリと笑う。「灯り、いるか?」。電車の空いた座席に、大柄なおばちゃんがお尻をねじ

込みながら言う。「いや、私にはちっさいイスやわ」  
「こんなにあけすけで、いいの?」。東京生まれ、東京育ちの記者は、関西に赴任してしばらくは当地の自虐ネタに気後れしていた。

大阪研究家の相愛大学特任教授、前垣和義さん(65)は言う。「関東の人ならば『しまった』と思って隠すことも、関西では『しめた』になる。笑いに価値を置く関西らしさが表れている」

確かに笑いの古典も、さらけ出すことで読者の笑いを引き出している。十返舎一九の滑稽本「東海道中膝栗毛」では、弥次喜多コンビが船上に過っておしっこをぶちまけるわ、宿の名前を忘れて迷子になるわの珍道中を繰り広げ、ベストセラーとなった。

関西人は笑いの基本に忠実というところか。それだけでもなぞぞうだ。「心理学の『自己開示』に近い効果があるのかもしれない」と言うのは、精神科医でおおさかメンター

ルヘルスケア研究所の代表理事、藤本修さん(60)だ。心に抱えた重いものを他者にはき出す自己開示は、話者の気持ちを楽にする。

しかしそれは、受け止めてくれる相手がいこそ。「自虐ネタは言われた側が試されているのです」と言う「関西人のルール」(中経出版)の著者でイラストレーター千秋育子さん(46)が、あなたを試す。

「わし、営業で頭を床にこすりつけすぎて、頭ツルツルやねん」。これにどう返しますか? 「ツルツルなんてこと、ないですよ」なんてのはバツテン。正答例は「帽子かぶりやすくなって、いいですよん!」。「それでええねん」と相手を受け止め、包み込む優しさを込めて、ツッコミを入れる高等テクニック。それができるから、関西には自虐ネタがあふれているのだ。(高橋健次郎)

メモ 自治体のPRにも自虐ネタが浸透中。「おしい! 広島県」や島根の「47番目に有名な県」が知られる。

